現実の王冠

tasogaremono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
現実の王冠

【Ｎコード】
Ｎ６７８６Ｚ

【作者名】
ｔａｓｏｇａｒｅｍｏｎｏ

【あらすじ】
武州で一人使い手が死んだ。其の時少年は決断を迫られる物語が始まり、時の歯車が回りだす。善か悪か　その答えは・・・
＊この物語は、ものすごく叩かれた超不人気作者であり、４Ｄの世界で厨二病疑惑しかなく、なにをやってもすべて不幸に転じるこの私が初めて公開する完全オリジナル物語です、どうぞ白い目でお読みください。ちなみに超不定期です

世界の仕組みと高校生

御守霊(みかみりょう)それは、幽霊であり、人間と交わることができる霊、そして、あらゆる分野で活躍している人間の相棒であり、また御守霊(みかみりょう)は人間の相棒である、互いの相互関係によって成り立ってきた世界、その世界には、いくらかの国があった、
独特の文化と歴史を持つ尖山中仁の文化を一部受け継いだ武州、
４つの地方からなる立憲君主制国家のイングラスコッティア王国、
共和制国家であるマッシリアフランソワ、
マッシリアフランソワの右側にあり、共和制国家のイータルサウニウム、
尖山中仁とほぼ同じ大きさの土地を持つ大統領共和制の二院制の国家レーテアウル、
レーテアウルの北部に位置する連邦立憲君主制国家バイデルカナディア、世界最高人口を誇る尖山中仁、
そして、国際不可侵の土地である極時大陸

６つの国からなる、もう一つのどこかにあるだろう地球

我々と変わらない暮らし
我々と変わらない食生活
我々と変わらない産業
我々と変わらない土地
我々と変わらない姿
我々と変わらない光景
我々と変わらない世界
我々と変わらない天気
そこにはテレビもあれば電車もある、車もあれば飛行機もある、空もあれば星もある、朝もあれば夜もある、森があれば海もある、一

般的な都会があれば秘境もある、戦争があれば革命もある、人もいれば動物や魚もいる、手もあれば足もある、顔があれば体もある、善人も入れば悪人もいる、貧乏も入れば金持ちもいる、文字もあれば数字もある、踏みにじるものもあれば踏みにじなれるものもある、そんなただの世界
その世界は少し変わっていた、それは、ごく普通のみじかな存在に空想と言うものが実現化し存在した世界
だが、それはなかっとことにされた世界でもあり、実在し今でもあるとこでは繁栄しているとされている世界

普通の高校生
そんな中でのそれはなんだろう、友達がいる、彼女彼氏がいる、やることが決まっている、いつもが退屈ではない生活を暮らしている何かと多くトラブルに巻き込まれやすい体質であったり、野球など何らかのスポーツ活動に激しく熱中していたり

たいていはそんなもんだろう
「はぁ～退屈だ・・・」少年はそんな風に行った
そんな物語である

朝日が窓から差し込み、目の前にいつもと同じ光景
「（朝か・・・）」
重苦しい体に鞭を打ちながら、その朝は始まった

居間に響くのは、何かを焼いたり、切ったりする音
『先日、花月市で御守霊使いが襲われる事件がおこりました、現在容疑者は逃走中、事件現場周辺では緊張した雰囲気に包まれています』
「（花月市ねぇ・・・俺の学校の近くじゃん、めんどくせぇ～）」

少年が暮らすのは武州のとある県のとある花月市というところ
少年はテレビのニュースを見ながらベーコンエッグにトースト、少しの野菜の朝食をつくり、ほおりこむ

「んじゃあ、いってきまーす」
髪を整え、誰もいない家に挨拶を告げ鍵をかけ、俺は学校に向かった
ただ何も考えず、ただ何も感じず、俺は自宅の階段を降りる
駅に向かって歩く
俺の住まいはただのボロアパート、何もないふつうのボロアパートでの一人暮らし

行く間の道には、猫が怪しく泣いていたり、悠然とカラスがゴミ箱をあさっていた
ただ電車に乗り少し離れた学校に向かう、駅に着き、同じ学生たちと思わしき集団と共に乗車する

「にしても、今日は暑いな〜」
今日は夏真っ盛り、しかも今日の気温は２３℃
うだるような暑さ、コンクリートからの照り返しが暑い
電車に降りた途端からその熱波に押しつぶされそうになった

毎日登る山道、まさに早朝ハイキングコースとはまさにこのことだった。
今日は真夏日
「（この俺に、死ねと？死ねと言ってるのだな？この魔の坂め！）」
心の中で虚しいツッコミを繰り返しながら黙々と坂を登る、そのたびに、背中から汗が流れ落ちた
耳元のイヤホンから洋楽が絶えず流れていた

「うぃーっす」
「よぉ、ヒロー」
「よぉ、小松ー」
教室に入ると数名の女子と俺の親友である小松靖道がいた
俺は自分の席に向かいながら

「嫌な気配しかしないなぁ・・・」
そう思いながら、授業は始まった

誘拐ＤＥＡＴＨ

俺はただ歩き、ただ電車に乗り、家に何も考えず向かっていった

「・・・」

俺は周りを確認する、どうやらこれは夢でも幻想でもなく、ちゃんとした現実である、しかもなんども場所を確かめてもここは俺の家のアパートの前だった

「（怪しすぎだろ・・・）」

俺のアパートの目の前に止まっているのは黒のいかにも怪しい車

「（誘拐、襲撃、昨日の事件と同じ犯人だとしても・・・大胆極まりないしな、絶対めんどくさいな～）」

ものすごく問題しかなかったし、関わりたくなかった

その中から出てくるのは、

黒サングラスで大体はわかるがどんな顔かわからないこんな真夏なのに黒いスーツを着た女二人組、いかにも暑そう、そして、めんどくさそう

「（痛々しい・・・しかも、暑そうだな）」

そんなことを思いながらその二人をスルーしようとする

着実に俺の方に無言で近づいてくる二人組

一人は、肩までである黒く長い髪

もう一人は、口元が緩んでいる

「・・・ヤバくね？」

俺が危機を察知し、自分のカバンを自分の部屋のドアに向けて投げ

つける、そして、それと同時に右足で加速を付け一気に走り出そうとするが

「（早い・・・！）」
俺は咄嗟に後ろ向きに走り出す、いろいろなものを踏み跳躍重視の疾走を作り、逃げようとするが
そして、
「（右足ボディーブロー！）」
口元が緩んだもう片方の女性がものすごい速度と共にボディーブローを放ってくる
「グフッ！」口元から多少血がでるもののなんとか堪えれる程度のもので、蹴りと同時に飛ばされる

後ろに回り込まれ、手を押さえ込まれる、関節技で半端なく痛い
「（捕まった！）」
そのまま抵抗できぬまま、車に連れ込まれ、自分の家の前から出る
「（誘拐されたー！）」

後ろに見える家がだんだん小さくなっていく、そして、俺の隣にいた女性がサングラスを外したとき、俺はその人物にものすごくがっかりした
そして、隣にいた女性が俺に向けてこういった
「やぁー！ひっさしぶり～！学生生活ｅｎｊｏｙしているかい？少年？」

ものすごいレベルでのがっかり、やっぱりじゃないけど、なんとなくそう思った気がするのであった

「少年じゃないでしょ？美雨姉さん」

「いや～久しぶりに呼ばれた気がするわ～」
明るいその女性、しかも運転している方の女性は
「お久しぶりだね～ヒロちゃん」
「あぁ、お久しぶりです、明美姉さん」
そう言いながら運転する女性

二人とも、よく知るというか、もはや家族同然の存在、二人とも小さい頃から世話になった姉妹で彼女たちは本家である、篝火流本家の分家である篝屋家の姉妹で、俺の母親の姉の子でいとこに当たる存在、だがその母親の姉さんはアメリカに行って仕事してて、小さい頃というか、数年前までは俺の家に3人一緒に住んでいたのである。その頃に家事の技術が上がったことは言うまでもないことで、最近では”もうお前ら3姉弟になっちまえよ”と言い出した母親がいた。しかも、羨ましいというかけしからんというかなんというか、二人ともそれなりのスタイルの持ち主で芸能界にスカウトされかけたこともあるくらいの持ち主なのである、しかし、家事ができないという反面を持つ、だから、最近は一週間に一度掃除に向かっているのである、ちなみに年末年始とお盆は基本的に一人暮らしの俺の家で過ごしているのである。

自分でも訳が分からいというくらいの解説を行いながら

俺は周りの風景を見ながら

「で、姉さんたちいきなり俺を捕まえてどうかしたんですか？」
「ちょっと、本家から呼ばれちゃってね？」
「で、例のごとく捕まえに来たと？」
「そゆこと～」
そう言いながらも車は高速道路に乗って本家である東山羽陸地方の火岩という場所に向かって行った

そんな中、車内で
「あっ、そうそう、家が汚くなったっていうか、手に負えないから」
「あぁ、言わなくてもわかってるっすよ、土日に向かいますね」
「ども～役に立つ～」
どうも俺の立場的に週一家政婦？になってる気がする

例えばこういうことがある
クリスマスになれば
「ねぇ～クリスマス～」
「ケーキですね？わかります」

正月になれば
「正月だ～」
「おせちですね・・・」

大晦日になれば
「大晦日～」
「お雑煮ね、今つくる」

夏になれば
「夏だ～！」
「そうめんでいい？」

そんな感じの生活が続いていた、驚くべきは小学校の頃

「えぇ～と・・・」
教師はその場の現状に困り果てた
明らかにそこにいるのは高校生、場違いなほどの高校生、といっても少し大人っぽかったからバレてない？多分本人たちはバレてない、

私服だし

「どうも～お迎えにきました～」対応に出るのはこの時高校生であった明美姉さんと期末テストで早く学校が終わったから明美と一緒に来た美雨姉さん
今日は、防災なんとかで親子が迎えに来るのだが、なぜか美雨姉さんと明美姉さんがいた

「ご親戚か何かで？」
「弘道の姉で～す」
「はぁ・・」
言葉につまる先生

そんな中、ランドセルを背負い帰りの支度をしていると
「おい、弘道？あれ、お前の母さん？」
「う～ん、あぁ、姉さんたち」
「・・・」
絶句する少年、彼こそ小学生以来からの友人である小松靖道、この頃から主人公のことを慕っていた
「絶句してどうしたんだ？珍しいことじゃないだろ？」
「珍・し・い・わ！ボケー！大体な、ここいら辺で有名のあのおふたがたがまさかのお迎えなんてしかも一人に！珍しいとしか言いようがねぇよ！」
ものすごい高いテンションレベルでツッコミをいれる靖道、言う通りこの頃から目を付けていた芸能各社が多数いるほど有名だったのであるお二人は
「しかも、使い手だぜ、ここいら辺でも有名な、焔龍と氷龍の使い手なんて見たこともねぇし、聞いたこともねぇ、そんな二人だぜ、テンションが上がらなくてどうするよ？」
ちなみに焔龍を使ってるのが美雨姉さんで氷龍を使っているのが明

美姉さんである
ちなみに焔龍の姫と氷龍の女王と呼ばれていたのはこの時、二人とも知らないことである

そんなふうに話していると
「帰るよ～ヒロ～」
明美姉さんが手招きしていた
「ＯＫ～」
そういうなりランドセルを担いで靖道に別れを告げて出た
終始、通学路では色々囁かれていた、その翌日学校では、超有名姉妹にまさかの弟？と言う格付けになっていた

「・・・で？明美姉さん、美雨姉さん？」
「「な～に？」」
「お母さんは？」
「仕事？」
「その時って、一人で帰るんじゃないの？」
美雨姉さんが親指をサムズアップして
「大丈夫だ、問題ない」
「（問題しかねぇぇぇ！）」
まったくもって、問題しかなかった
「んで、まぁ、来てくれたのは嬉しいな」
適当にお世辞を言っておく
そういうと、明美姉さんが
「あぁ、そうそう、お母さんなんだけど、仕事でこれないからっていう理由で私たちに委託したわけよ」
「へぇ～（このやろぉぉぉ！）」
とりあえず、問い詰めなければ（色々な意味で）ならないことが増えた気がする
母親は、姉達に似て天真爛漫な性格で、姉達とも仲が非常によい

「（まぁ、いっか）」
そんな感じだった
過去を振り返りながら、窓を眺めていると、東山羽陸地方に入った
周りの景色には山が多い、むしろ山しかない
俺は起きているのに隣の美雨姉さんは俺によりかかるように寝ている
「いや～ヒロ～毎回申し訳ないね～」
「まぁ勉強になりますし？」
「夜の？」
「いいえ、違いますけど」
あまりの言葉に驚愕しながらも毎度のことだと思いサラっと流す
そんな中、車は山の中を進んでいった、ただ一つあるとすれば、姉さんの目付きが真剣になり
「……姉さん？まさかとは思うけど。ここでは……」
「さあて。そろそろ行きましょうかね」
「…どうかお手柔らかに……とは行かないだろうね」
明美姉さんは、都会では最高に安全なドライバー。
そう、都会では
そんななんにも変わらない声と共にものすごい速度で目を覚ます美雨姉さん、そして
「んじゃ、舌噛まないようにしねぇとな」
「えぇ」
山の中に悲鳴がこだました
明美姉さんの車が山道のカーブでをドリフトし始めた、危ないった

らきりがない、むしろ危ないとしか言いようがない。運転席では物凄い真剣な顔をした明美姉さんがハンドルとブレーキを颯爽とさばいていた。右に投げ出されると思えば左に投げ出される、まさに地獄

それから、いつもなら高速道路降りてから４０分くらいのところを２０分くらいで到着してしまった

「ヤベェ・・・吐きそう」

「大丈夫？」

美雨姉さんはなぜか耐えられたみたいだが、俺は久しぶりすぎて耐性が付いていなかった

俺は重苦しいドアを開けていき、中に入っていく

長い廊下を歩いていくと、３０畳はある大広間に出る、そこには分家の人や本家の知り合いなどたくさんいた

「おっ、来たきた」

中央の上席にいるテンションが高いこの白髪白ひげの老人こそ、篝火流本家３０代目当主篝火大和、俺のおじさんちなみに年齢は８０才ぴったし

「おひさしぶりじゃな、ヒロ君？」

俺は正座してその頭首と対面する

「お久しぶりです御館様」

「あぁ、堅苦しい挨拶はなしじゃ、ほれ、皆のもの集まれ」

そういうと中央の当主の直角になるように本家の人と分家の人、もちろん俺も正座その隣に明美姉さんと美雨姉さんが座る

「あぁ、皆も分かってのとおりじゃが、我らが管轄する祠の結界が異常をきたした、そのため、もう一度封印を行う、儀式を行う日は明朝、皆のものそれまで解散じゃ」

広間がものすごい緊張した雰囲気になる、母親によると祠には武州でもそれほど数が少ないとされている封印指定のかかったとてつもないのがおり、それを沈めるのが我々の役割だというらしい
ちなみに、このことは武州政府はしらないことで、これは内密に行わなければならない、そのために実行時にはより一層の警戒が必要とされる
「で、担当なんじゃが」
そういうとなにやらボールペンで書かれた紙を取り出し
「えぇ～と、」黙々と担当を読み上げていく、その間終始退屈な俺、今回の役割はどうやら姉達の補佐らしい

自分の役割を確認したと同時に本家に戻っていく面々
「・・・これだけ？」
「そうよ、これだけ、ちなみに、今日泊まっていけってお母さんから言われてるわよ？」
「んで、部屋は？」
「おばさんの話によると3人一緒らしいよ？」明美姉さんがなぜかわからないが俺の荷物を持っていた
「マジか？（風紀委員！どこかに風紀委員はいないか！？）」
まさかの部屋が3人一緒、しかもこの年齢、犯罪の臭いしかしない、とりあえず文句は言えないので渋々部屋に行く

「んまぁ、ご定番のこの部屋ですか」
毎度おなじみというか、もはや見知った部屋だった
ドアが開く音と共にそこに入ってくるのは
「ヒロ～いるかい～」
美雨姉さんだった
「どうした？美雨姉さん？」
「あぁ～ちょいと来てだって～」

「本家の人が？」
「そう～」
「Ｏｋ～」
そういうと美雨姉さんに連れられ本家の大広間に向かうと、既に夕食の用意ができていた
広間には、大量の食事唐揚げから、煮物まで数が豊富だった
「久しぶりだし、今宵は宴じゃ！」
この当主（おじさん）は緊急事態なのに何言ってるんだろうと思いながら俺はご飯にありついた
終始、酒が入り、二人とも俺だけに絡んでくる、とても困る、そうとても困る

俺はそのあと、酔いつぶれた二人を布団に寝かす、そして、俺も布団で寝ようとしたら
「（布団がない・・・だと・・・）」
布団が二枚しかなかった、これはよかったもし、二人が正気状態だったら、絶対俺は布団で寝かされどちらかが俺の後ろまたは前で密着した状態で寝なければならない状態になっていたのである
「んまぁ、結果オーライなのかな？」
とりあえず、誰も部屋には入れないように、少し小細工をかけ、俺は台所にいるおばさんのところに向かう
「あぁ～おばさん？」
「なんだいヒロ君？」
台所ではおばさんが明日の朝食の下準備をしていた
「少し夜風にあたってきます」
「いってらっしゃい」
そういうと身近にあった布をかっさらいむかった

この時、少年は知らなかった、まさか、あんなことになるなんて、思いもよらなかったことを

始まりの夜と出会い

ヒュルルルル、夏の夜風が気持ち良い
「（こんな日は、あの場所から星でも眺めようかな？）」
俺はそのまま、山道を進み、いつもというわけではないが夏によく星が見えるちいさな広場まで向かっていった
時間も確認しようと思ったが携帯電話を家においてきたらしい
ここいら周辺は都会の光が入ってこない場所で、山の中だから天気が良いとかなりたくさんの星が見える、まぁ、言ってしまうと田舎だからよく星が見えたといったところだ

ペガサスに、オリオン、それに北十字、北極星、金星、火星、天の川、俺の視界すべての星が綺麗で幻想的だった

ちなみに、ここは俺も知らない祠、今回早朝に行く祠は、これよりもうちょっと山の上にあるはず、ちなみに俺は、その祠の近くの石がちょうど良い枕と同じ高さだったので持ってきた布を石を上にかけ枕替わりとして横たわり、星をしばらく見て物思いに老けたあと、少し目を閉じた

それから数時間後、俺の感覚が正しければ深夜2時位だろう、草木も眠る丑三つ時
ふわりとした感覚の後、俺はふと目を覚ます
俺はその光景に驚いた、星明かりで照らされる中、その女の子はいた
「・・・どうも」
なぜ、こんな言葉が出たのかわからない、なぜだろ、自分自身に問

い詰めてもわからなかった、頭にはたしかに温もりがあった。そして、その子はニッコリと笑った、年齢的に見て俺と同じくらいだった。瞳の色は透き通って曇りひとつない黒で明美姉さんや美雨姉さんに負けないくらいの可愛い顔立ち、黒く長い髪に経帷子（キョウカタビラ）を着ていて、華奢な腕が俺の頭やおでこあたりを優しく撫でていた。
「（あれ、俺いつのまに寝たんだ？）」
相変わらず、笑顔で俺のことを撫でてくるその女の子

「（ちょっと我慢してね？）」頭の中にその女の子と思わしき声が響いたあとニッコリと笑う
唐突に

「（何を？）」そう思った瞬間、ぬくもりと共に金縛り状態になる
四肢がまるで満足に動かせなくなる
それと同時に女の子の右腕に現れた赤い玉に、物凄い量の言が何かの術式を組み込むようにその赤い玉の中に収束されていき、それはやがて赤い光となり
その光が俺の体の中に入っていくと同時に

イナズマのように激痛が走る、それと同時に激痛が体の中を貫いた、それは拒否反応と言えるべきことだった、しかしやがて痛みは引いていく、そのたびになぜか背中と左腕が痒かった
そして、俺の意識は瞬間的に途切れ、闇に落ちた

気づいたら周りは火の海、燃え盛る火の中、逃げ惑う人々、
そんな中に、ひとりの影、なかなか顔が見えない、顔にはとげとげしい赤い痣見るだけでも痛々しかった、金色の刺繍が入った黒い和

服、赤と紫の帯、その姿にはどこか艶やかな姿、ただどこかに悲しみがある

「キャアー！厄災の姫よ！」
「皆のもの逃げよ！」
なにやら逃げている人々、刀をもった影は刀を振り上げたそれを振り下ろした瞬間直後大地を切り裂いた

それと同時に、俺の意識は飛んだ

「・・・・・・ぶ！」
「・・・・・・だいじ・・・・・・！」

かすかに声が聞こえてくる、それはやがてはっきりとしたものになり
「ねぇ、大丈夫？」
初めてその子の声が耳で聞こえた、かわいらしくて聴きやすい
「あっ、うん」
何がなんだかわからない、ただ、目の前の子を泣かせちゃダメだとは思った
「痛くなかった？」
「少し痛かったかな？」
額からは大量の汗が吹きこぼれていた
そんな俺をみて、再び頭を撫でてくる

「もしかして怖かった？」
「正直言うとな、まぁこの世がこの世だしね」
「かわいいね」
「そりゃどうも」
彼女は可愛いといったが彼女も十分可愛かった

「お名前は？」
「う～ん」
少し考え込んだあと
「紅花夜姫（あかはなよるひめ）」
俺は驚愕した、目の前にというか膝枕しているのが、赤き夜の厄災の姫、そう自分の家系で最も恐れられており、早朝封印しようとしていたものだったということだ
そして、驚愕したのが、これほどまでに美しい人だとは思わなかった

「なんか知ってるの？」
「うん、あぁ・・・」少し怖がってしまう
「怖いの？」
「いいや、怖くねぇな」
「…どう、して…？」
「ばっかばかしい。理由なんていらねえだろうが、別に特別なことなんざ何もねーよ。　俺の本能がたった一言、この俺に向けて言っただけだ
こいつを助けて、守ってやれってな」

「そんなこと、どこで言えるの？私、厄災の姫って呼ばれてたんだよ」
少し涙をながしそうになる夜姫（よるひめ）
「どこって、そりゃあ決まってますよ

―――心に、決まってんだろ」
俺は夜姫に対してそういった、途端
ドサッ！夜姫が俺に覆いかぶさるように倒れてきた
「あなたを信じていい？」
「もちのろんだ」

その途端、花のように綺麗な赤い光が二人の周りを包み込んだ
それは、二人が固い絆で結ばれた証だった
そして、夜姫の服が経帷子（キョウカタビラ）からあの夢で見た金色の刺繍が入った黒い和服、赤と紫の帯になった
夢の中で見るより何倍も艶やかさが強調されていた

「いくよ」
「あぁ、もうひとね寝させてくれ」

ズテンッ！壮大に夜姫がコケた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6786z/

現実の王冠

2011年12月28日22時51分発行